



答えがわかると ズツとする話

S
y
t
r
y

Presented by
Sytry



気がつく
学校の図書館だった

いらっしやい
やっと来て
くれたのね

はじめまして
あかり
私は灯

本には、ときどき
『ふたつの選択肢』が現れるわ

A HAPPY END

B BAD END

これを
読んでほしいの

何も
書かれていない？

この本には、この街の
学校に通うみんなの
未来が書かれているの

でも、本の呪いが
その未来を恐ろしい
ものに変えてしまう

どちらの未来へ進むか
決められるのは、あなただけ

私の力はある子の
未来を選んだときに
使い果たしたけど…

あなたと一緒になら、
まだ戦えるわ

物語に隠された
真実を見抜けば、
呪いは解ける

学校みんなを
救うために、あなたの
力を貸してほしいの

怖いけど、みんなのためなら

さあ、私と一緒に
物語に隠された真実を
見抜きましょう

そして、あなたの力で
未来を救って

第1章 —— 意味がわかると怖い学校の話

007

校庭のゾンビ／没収／楽器は友達／明日にはきれいに／花子さん／窓際の席
今日、娘は休みます／体育館のいれうゆ／人体模型の交換／二十四時間で消える
廊下を走ってはいけない／三か月後の体重／幽霊放送／手を合わせてはいけない
白いカラス／心のこもった彫刻／靴箱の手紙／家庭科室のミシン／プールの底の声
ひとりはみんなのために／未来がわかるSNS／AIの答え／山登りの約束

第2章 —— 意味がわかると怖い友達の話

107

こつくりさんは知っている／裏アカの正体／ふたり分のお弁当／ひろみの名前
秘密基地「証」／いい子さん／ぬいぐるみの目／公園の友達／おそろい
世界一仲良しのクラス／それ、ほしい／花壇の中で／一番大切な友達

第3章 —— 意味がわかると怖い勉強の話

165

簡単すぎる宿題／自動で問題を解くえんぴつ／絶対に合格できるおまじない
国語辞典の落書き／お母さんの絵／百年分の勉強／テストの点数
読書感想文／時を超えた文通

第4章 —— 意味がわかると怖い恋の話

203

告白代行／僕と見た映画／笑顔のミサンガ／魔法のチョコ／想いのこもった手紙
ヒーロー作戦／世界で一番好きな人／黒板の相合傘／最後の手紙
彼女の場所を奪いたい／恋の後押し

第5章 —— 意味がわかると切ない話

253

ふたりの図書館／グループトークから消して／死ぬまで一緒に

第 1 章

意味がわかると怖い学校の話

校庭のゾンビ

放課後、今日も僕は友達と集まって、校庭でサッカーをして遊んでいた。

この学校にはサッカーボールがたくさんある。古いボールが使えなくなっても、すぐ新しいものが補充されるから、ほかの子とボールの取り合いになったことはない。

それでサッカーばかりするようになるから、みんな自然とすごくうまくなっていく。

負けてられない。僕ももつとうまくなって、いつかサッカー選手になるのが夢だ。

ふと、鉄棒のほうに目を向けると、自分と同じくらいの年の男の子が逆上がりをしながらこちらを見ていた。……あんな子、この学校にいたかな？

なんだか不気味な雰囲気の子だ。まるで死んでいるみたい。

「なあ、知ってるか？」

僕は学校のある怖い話を思い出し、ヒソヒソとみんなに話す。それは、こんな話だ。

放課後、子どもが楽しそうに遊んでいると、その声に引き寄せられて、グラウンドにゾン

ビが現れる。それは鋭い牙を持ち、噛まれると、同じ姿の化け物に変えられてしまう……

鉄棒の男の子は、うつむいていて口元が見えない。もしかしたら、あの口にはゾンビみたいに鋭い牙があるのかもしれない……

「さとる、話しかけてこいよ」

そう言って、友達のひとりが僕の背中を押した。

「ええ」

……またかよ。このグループにいと、いつもいやな役は僕に押しつけられる。リーダー的存在と言えば聞こえはいいけれど、僕が断れないだけで、みんなはそれをよく知っている。仕方なくボールをけりながら、男の子のほうへ向かう。近くで見ると、さらに不気味な子だ。枯れた枝のようにやせ細っていて、顔も青白い。

本当に化け物なら、ボールをけて、その隙に逃げよう。

「何年生？　ひとりで何してるの？」

怖がっているとわからないように、けろりとした態度で聞いた。

その子は顔を上げて「四年生」と答えた。

ひとつ下か。口を見たが、牙はない。声は意外と高くて優しい感じだ。

「ごめん。ずっと見てて気持ち悪かったよね。実は今日、転校してきたばかりで友達がいない……」

ゾンビの正体は、さとのたちがずっとつけていた、サッカーボールのほうだったの。

この学校は、古いボールが使えなくなっても、すぐ新しいものが補充される。

さとははそれを便利なことだと思っていたけれど、その新しいボールがどこから来るのかまでは考えていなかったのね。

さっきまで一緒にいた友達の姿は消え、代わりに校庭にはたくさんさんのボールと、みんなの服だけが残っていた。

つまり、友達もサッカーボールに変えられてしまったのですね。

そして、さとの足首に鋭い痛みが走ったのは、足元のボールに噛まれたから。

さともきっと、もうすぐ新しいボールのひとつになる。

そして明日には、何も知らない子どもたちが、そのボールをけて、楽しくサッカーをするのですね。



鉄棒から下りて、男の子はうつむいた。
なんだ、そういうことか。

「サッカー好き？ 一緒に遊ばない？」

僕の言葉に、男の子はパアと顔を明るくして、元気よく「うん！ 実はさっきから入れてもらいたかったんだ！」と笑った。キラキラした目で、僕の足元にあるボールを見つめる。

なんだ。かわいいじゃん。というか、マジでごめん。君のこと、本気でゾンビだと思ってた。

そのとき突然、男の子の顔から血の気が引き、表情が固まった。

「牙……」

そうつぶやくと、男の子の視線が僕のうしろに移る。

振り返ると、たくさんさんのボールが校庭をはねていた。さっきまで遊んでいたみんなの姿がない。

代わりに、校庭の塵と一緒にみんなの着ていた服が舞っていた。

「一体、何が起こったんだ……？」

とまどっている、

……ギチッ、グチャ。

「痛っ！」

足首に何か鋭い痛みが走った。

没収

うちの中学はとにかく校則が厳しい。特に担任の平林先生は校則にうるさかった。

運が悪いことに、友達のれいかが目をつけられてしまった。きっかけは髪の色。れいかは地毛が少し茶色っぽい。それを平林先生に染めていると勘違いされたのだ。

「地毛が茶髪なら校則違反だ。黒く染めてこい！」

ムチャクチャだ。平林先生は、少しでも校則違反があると、すぐに生徒を怒鳴りつける。れいかの髪みたいのに、理不尽なことだって平気で言う。

それをまるで楽しんでやっているみたいで、みんなからは嫌われ、とっても怖がられていた。髪のこととはほかの女の先生が説得してくれて、地毛のままでよくなった。けれど、それが悔しかったのか、平林先生は、れいかに異常に厳しくなった。

ある日、れいかが大切にしているぬいぐるみのキーホルダーを、平林先生が没収した。大

きさが規定より数センチだけ大きかったらしい。

「明日まであずかっておく」と平林先生は言った。

翌日、キーホルダーを返してもらおうと、私とれいかは平林先生のもとへ行った。しかし、平林先生は言った。

「キーホルダーはもう捨ててしまった」と。

平林先生は没収したものを家に持ち帰り、気に入ったものは自分のものにして、あとは捨ててしまうと噂では聞いていた。

れいかは泣いていた。大粒の涙をこぼして。そのキーホルダーは死んだおじいちゃんにもらったもので、大切な形見だったらしい。

次の日、れいかはげっそりとした暗い顔で登校した。

れいかになんて声をかけたらいいかわからなくて、とっさに昨日のある事件について話した。あとから思えば、ほかにもつといい話題はあったはずなのに。

「ねえ、昨日の事件の話、聞いた？　うちの女子生徒が誰かに刺されて重傷って話。犯人は無差別に人を襲う凶悪犯かもって噂らしいよ。怖いよね」

私が話しかけても、れいかは相づちもうたず、ぼんやりとしていた。

平林先生は、没収したものを家に持ち帰る先生だった。

気に入ったものは自分のものにして、いらぬものは捨ててしまう。

れいかは、そのことを知っていたのね。

未開封のポテチの袋がいくつもあったのは、その中に包丁を紛れ込ませるためだったの。

女子生徒を刺した事件に使われた包丁をね。

平林先生は、いつものように没収品を家に持ち帰った。

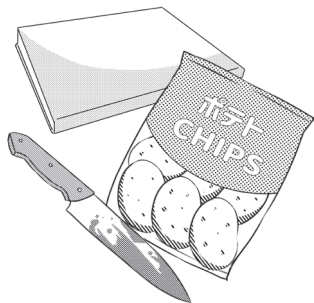
そのせいで、女子生徒の血がついた包丁が、平林先生の家から見つかったしまったの。

つまり、平林先生は事件の犯人ではなかった。

本当の犯人は、れいかだったのね。

大切な形見を捨てられた復讐として、平林先生を犯人に仕立て上げたの。

平林先生は、たしかに理不尽でひどい先生だった。でも、無関係な女子生徒を傷つけてまで、復讐を成し遂げたれいかのほうが、ずっと恐ろしい人ね。



やっぱり、昨日のことがショックなんだろうな。

「れいか、あのさ……」

言いかけると、れいかは突然、机に漫画やお菓子、ゲームを並べ出す。

そして、わざと大きな音を立ててポテチの袋を開けた。そのままポテチをつまみ、漫画を読んで、ゲームまで始めた。まだ開けてもいないポテチの袋が十袋くらいあった。

「そんなことしたら、また平林先生に没収されるよ」

「いいの。別に」

きつものすごく怒られるとヒヤヒヤしていたら、平林先生が来た。案の定、れいかは今までにないほど叱られ、漫画もお菓子もゲームも全部、乱暴に没収された。

だけど、れいかはうつすらと笑っていた。

そうか。これは全部わざとで、れいかなりの復讐なんだ。

しかし、それから数日後、大変なことが起きた。

なんと平林先生が例の女子生徒を刺した事件の犯人として逮捕されたのだ。きっかけは女子生徒の血がついた包丁が平林先生の家から見つかったことらしい。

そのニュースを聞いたあと、れいかはまた笑っていた。

「全部、先生が悪いんだよ」と言ってる。

楽器は友達

中学校に入学してすぐ、出席番号が近いなつみという女の子と友達になった。

内気な私は今のところ、なつみしか友達がいらない。

普段はいい子だけれど、とてもおしゃべりな子だ。授業中とか、自習中とか、静かにしないといけないときにも、よく話しかけてくる。

悪いことだとわかってはいたけれど、なつみに嫌われたら困るから、私も一緒になっておしゃべりしていた。

音楽の授業中。クラシック音楽を聴く時間なのに、なつみがまたしゃべりかけてきた。

そのとき、音楽の山下先生が私たちに注意をした。

「まきさん、なつみさん、静かにするのは苦手？ おしゃべりして楽しいからね。……そうだ。

今日はみんなで楽器を演奏しましょう。楽器は友達。みんなとも楽しくおしゃべりしてくれ

るわ」

そう言って、山下先生はみんなを音楽室の隣にある音楽準備室に招いた。

そこにはたくさんさんの楽器があった。足の踏み場もないほど積み上げられた楽器の中には、見たこともない変わった形のものもある。どんな音がするんだろう。

楽器にはそれぞれお名前テープが貼ってある。「ゆうくん」とか「ななちゃん」とか。

「この楽器、誰かのものだったんですか？」

聞いてみたけれど、山下先生は「気にしないで」と笑う。

その日はみんなで好きな楽器を手に取り、楽しい時間を過ごした。

何日かして、全校集会でまた、なつみがしゃべりかけてきた。校長先生が話しているから、静かにしないといけないのに。ほんと、困るなあ……

でも、私も一緒になっておしゃべりをやめなかった。

そのとき、うしろから山下先生がささやく。

「あなたたち、本当におしゃべりが好きなのね。じゃあ、もっとおしゃべりできるようにしないかね」

私は急にクラっときて、目の前が真っ白になった。

山下先生の言う「楽器は友達」は、ただのたとえではなかったの。
音楽準備室にあった楽器に貼られていたお名前テープ。

あれは持ち主の名前ではなく、楽器に変えられてしまった子どもたちの名前だったの。

なつみはおしゃべりをやめられなかった。まきも、本当は悪いとわかっていたのに嫌われるのが怖くておしゃべりを続けてしまった。

山下先生は、そんなふたりを「もっとおしゃべりできる友達」にしてあげたのね。

もちろん、人間としてではなく、音を鳴らす楽器として。

白いギターに貼られていた「なつみちゃん」という名前。そして、まきのお腹から聞こえた太鼓の音。

つまり、なつみはギターになり、まきも太鼓のような楽器に変えられてしまったのでしょうか。

静かにできない子は、言葉ではなく音でおしゃべりすればいい。これからは言葉で話すことはできないけれど、きれいな音を鳴らしながら、ずっとおしゃべりを続けるのでしょうかね。壊れて、音が出なくなるその日まで。



遠くから、ギターの音が聞こえてくる。悲しげで、何かを訴えかけているような音……

その音で気がついた私は、音楽準備室にいた。薄暗い部屋で楽器に囲まれている。

「あら、目が覚めたの？」

目の前に山下先生がいた。

……

「ごめんなさい。私はただ、友達に嫌われるのが怖くておしゃべりしてただけで、本当は……」
「大丈夫。心配しなくても、もうお友達に嫌われることもないし、たくさんおしゃべりしながら楽しく暮らせるわよ」

山下先生は優しい笑顔なのに、怖くて仕方がない。

思わず逃げ出そうとすると、横にあった白いギターにつまづいて転んでしまった。

地面にぶつかったとき、ドン、と太鼓の音がする。その音は、私の中から聞こえた気がした。

違和感に気づき、お腹に触れると、ザラザラと変な感触がする。

指先が触れた瞬間、ポン、と低い音が鳴った。まるで、太鼓みたいに。

山下先生が迫る。

身を守るようにギターを手にとると、そこには、「なつみちゃん」と書かれていた。

「楽器は友達。静かな子より、おしゃべりな子のほうが、いい友達になれるのよ」

まるで返事をするみたいに、部屋中の楽器が小さく鳴った。

明日にはきれいに

朝、中学校に來ると学校中が血しぶきだらけになっていた。それに床も何ヶ所か穴が開いていた。誰かがハンマーで壊したみたいだった。

みんなは「殺人事件が起きたんだ」「誰かを殺したあと、穴の開いた床に人を埋めたんだ」と大騒ぎする。

だが、調べると、血しぶきは本物の血ではなく、ただのペンキだった。穴の中には何もなく、誰かのイタズラだろうと先生たちは結論づけた。

……でも、俺は犯人がわかっていた。

引き出しを見ると、俺の教科書だけペンキで真っ赤だった。

騒動に紛れて俺に復讐したつもりだろうが、見え見えだ。こんなセコいことをするのは、美術部のほしやしかない。

今までほしやを散たいじめてやったが、とうとう反撃に出たってわけだ。

美術部で普段から絵を描くほしやなら、この量のペンキを用意するのも不可能ではない。

それに絵はうまいから、血のような赤色も簡単に作れるだろうし、文化祭では大道具を担当していたから、床に穴を開けるみたいなのがかりなことできるだろう。

騒ぎのあった日は午前中で授業が終わり、午後は先生たちが掃除をするとかで休みになった。明日も掃除で休み。

先生は「明日には全部元通りになるから、心配しなくていい」と言っていたが、みんなは心配するどころか、突然の休みにラッキーだと浮かれていた。

俺はほしやの復讐を全部、無駄にしてやるために、あいつがやったという証拠しょうこをつかもうと監視していた。

だが結局、何も証拠は得られなかった。

しぶしぶ帰ろうとすると、靴箱でニタニタと気色の悪い笑みを浮かべるほしやに呼び止められた。

「……なんだか、災難だったみたいだね。でも、君の教科書が汚いのはいつものことだろう。ちよっと赤くなっただけでクヨクヨするなよ」

やっぱりお前がやったのか！

俺は頭にきて、ほしやにつかみかろうとするが、ほしやはその手をかわし、走り去った。

ほしやは、これから起こす事件を隠すために、先に学校中を事件現場のようにしていた。

学校中に血のようなペンキをまいておけば、本物の血が混じってもわからない。床に穴を開けておけば、そこに人を落とすことも、隠すこともできる。

そして先生たちは、午後から学校中をきれいに掃除すると言っていた。血や足跡を洗い流し、床に開いた穴もふさいで、全部元通り。

いじめっ子のしょうごだけが犯人に気づいているつもりだった。でも本当は、ほしやに誘導されていたの。

……怒って追いかけてくることまでわかっていたのですね。どうして人間って、いじめる側の自分だけは、ずっと強くて安全だと勘違いしてしまうのかしら？



「てめえ！ ぶん殴ってやる！」

全力で追いかける。ほしやは一階の美術室の方向に走って行った。

さすがに俺のほうが速い。指先がほしやの髪をかすめる。

もう少しでほしやの背中に手が届きかけたとき、何かにつまずいて転んだ。

……穴だ。ハンマーで開けられていた穴。

思ったより深い。ただのイタズラで開けたにしては、人ひとり分くらい、すっぽり入りそうな大きさで、のぞくと吸い込まれてしまいそうだ。

周りには血しぶきがまだ残っている。

この赤、本当にペンキだよな？

本物の血が混じっていても、すぐにはわからないんじゃないか……？

そのとき、俺はハッと気づいた。

先生たちは今日の午後から学校の掃除を始める。

ペンキも、足跡も、床の穴も。

ほしやは復讐を終えたんじゃない。見渡せば、^{ひとけ}人気のない場所。

ほしやは服の中から、銀色に光るものを取り出した。

「大丈夫、明日までには全部、きれいに掃除されるから」

花子さん

私の通う小学校のグラウンドにある古びた女子トイレには、花子さんが出るという噂があった。

噂では、トイレの手前から三番目の個室を四回ノックすると、花子さんが現れる。

花子さんは、昔、トイレに閉じ込められて、そのまま食べるものがなくて死んでしまったらしい。だから花子さんは呼び出した人をトイレに閉じ込めて、食べてしまうのだという。

「どう、あります？ 怖いでしょう？」

お姉ちゃんが私に言った。私を怖がらせてやろうとしているのがバレバレだ。

「そんな話、信じてない。全然怖くないし」

かっこつけて、怖くないふりをした。すると、お姉ちゃんにはやりと笑って「じゃあ、実際にやってきてよ」と、恐ろしいことを言った。

「簡単だよ。怖がってるお姉ちゃんのほうがダサイ」

ふん、と強がってみたものの、本当は絶対にやりたくない。なんで私、変なところ見栄って張るんだろう。

やっぱりいやだとは言い出せず、学校が終わったあと、お姉ちゃんと噂のトイレに向かう。

「何かあったら助けてえー、って、情けない声で泣くんだよ」とお姉ちゃんは笑った。

「そんなこと絶対しない！ もう子どもじゃないもん」

お姉ちゃんに見守られながら、トイレに入る。

かなり古いし、汚れている。

花子さんが怖くて、誰も掃除してないのかな。かび臭いし、電球も切れかかっている。

手洗い場の鏡には怯え切った私の顔。もう帰りたい。

意を決して、三番目の個室のドアの前まで進み、一呼吸おいてから、四回、ノックをした。すると、ドアが勝手に開いた。

ドキッとして思わず目を閉じる。

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

けれど、何も起こらない。

そっと目を開ける。

そこにいたのは、女の子ではなく、大きな茶色い犬だった。

三番目の個室から現れたのは、女の子の幽霊ではなく、大きな茶色い犬だった。

でも、その首輪には、かすれた文字で「はな……」と書かれていた。

その犬の名前が、「花子」だったのですね。

つまり、噂に出てきた花子さんの正体は、トイレに閉じ込められて死んだ女の子ではなく、お腹を空かせたまま死んでしまった犬だったの。

花子さんは、呼び出した人をトイレに閉じ込めて、食べてしまう。その噂は、間違っていなかった。

ただ、みんなが勝手に「花子さん」を人間の女の子だと思い込んでいただけ。

扉が開かなかったのは、もう花子さんのトイレから逃げられなくなっていたから。

……怪談に現れる霊が、人間だけとは限らない。

だって、恨みを残して死ぬのは……人間だけじゃないからね。

「わんちゃんだ！」

犬が大好きな私は、駆け寄って犬を思いつきりなでなでした。

なんでこんなところにいるんだろう？ 迷子かなあ？

首輪をつけているし、とても人懐っこくていい子だ。

とりあえず外に出ようと、犬を連れて、入口の扉を開けようとした。

……しかし、扉は開かない。

「あれ、なんでだろう？ 壊れてるのかな？」

そのとき、犬が私のスカートのすそを噛んだ。

「どうしたの？」

首輪に何か刻まれているのが見えた。かすれた文字で「はな……」とだけ読めた。そのあとに続く文字は消えてしまっている。

牙の隙間から、妙に生臭いにおいがした。犬の口が、見る見る大きくなっていく。

それから、どのくらい経っただろう？

薄れゆく意識の中で、声を聞いた。お姉ちゃんの声だ。

「ねえ、ありす？ 大丈夫？ なんか、クチャクチャって、大きな音がするけど……」

窓際の席

中学校に入学してから初めての席替えをした。

そこは教室の一番うしろのすみっこで、先生にバレずに居眠りするには最適だった。

窓際で、今日みたいに暑い日には風もすずしくて気持ちいい。

親のすすめで、テニス部に入ったのはいいものの、運動系の部活は疲れる。勉強と両立するのはほんと、大変。

しかも体育のあとの数学って超ダルい。ウトウトして、次第に目を開けてるのがしんどくなってきた。

……どうせこの席ならバレないし、ちょっと寝ちゃおうかな。

まどろみの中で、隣から男子の声がした。

「ねえ、手をつなごうよ。そうすれば友達になれるから」

この人、誰だっけ？

目を閉じたまま考える。

まだ夏休み前で、全員の顔と名前が一致しない。特に男子は。

「いやだよ。私、眠いの。それに、いきなり手をつなごうとか、キモイよちょっと」

小声で言った。もう起きてるものしんどいから、少し眠らせてほしい。

「そんなこと言わずにさ。手をつないでくれたら、すっごく楽しいことがあるよ。友達もた
くさんできる」

よく聞くと透き通ったいい声だ。

あれ？ 隣にこんなイケメンっぽい声の人いたっけ？

……ダメだ。眠くて頭が回らない。

「イヤイヤ。めんどくさい。今、眠いから」

すると次は、男子の声がした場所から女子の声がした。

「私とならいいでしょ？ ね？ 手をつなぎましょうよ」

え？ 誰この子？

女子はさすがに顔と名前は覚えてるけれど、こんな声の子いたっけ？

「あとにしてよ。今、授業中だし」

「いいじゃない。手をつなげば、友達になれるわ。私と友達になりましょうよ。私とならいいでしょ？」

ひなたに話しかけていたのは、隣の席のクラスメイトではなかったの。

ひなたは、教室の一番うしろの窓際の席に座っていた。そして、左手を伸ばしかけた先にあったのは、誰かの手ではなく、開いた窓の向こうの青い空だった。

つまり、ひなたを誘っていた声は、窓の外から聞こえていたのね。

「手をつなごうよ。そうすれば友達になれるから」

その言葉は、ただ友達になりたいという意味ではなかった。

手をつないだら、ひなたは窓の外へ引きずり出されていたでしょうね。

そこは二階の教室。

先生が起こしてくれなければ、ひなたはきっと、命を落としていた。

……授業中に少しくらい居眠りしたくなる気持ちはわかるわ。

でも、窓際の席で眠るときは気をつけて。

寝ぼけて差し出した手を、誰が握るかわからないもの。

なんだか少し寂しそうな声だった。
「なんでそんなに手をつなぎたがるかなあ。手をつなげば友達って、小学生じゃないんだから……」

そう言いつつ、もう反論するのがめんどくさくなっていた。

「はい、どうぞ」と左手を動かした。

そのとき、「おーい、寝るなあ、起きて起きて」と先生が私の肩を叩いた。

そこで私はハッと目を覚ました。

何してたんだろう、私？

伸ばしかけた左手の先には、青く澄んだ空があった。

開いた窓からすずしい風が吹いて、頬をなでる。ここは、二階の教室だ。

今日、娘は休みます

五年生の担任になってから、一か月が経った。

私はある生徒、北山ことはさんが、クラス替えをしてから一度も登校していないことを疑問に思っていた。

この学校では、欠席は親が連絡することになっている。

いつも母親が「今日、娘は休みます」と連絡をしてくるのだ。

「今日は風邪っぽくて……」

「頭痛がすると言っていて……」

「昨日、足を怪我^{けが}してしまって……」

毎日いろいろと理由をつけるが、やはり何か怪しい。

きっと若い母親なのだろう。少し高い声だが、どこか演技をしているような、何かを隠しているような声色で話す。

もしかして母親がことはさんを監禁しているのではないか？

母親に一度も会ったことがないし、今日は家まで行ってみよう。

そう思い立って家の玄関の前まで来たが、家はごく普通の一軒家。インターフォンを押すと、しばらくしていつも電話で聞く母親の声が玄関から聞こえた。

「どちら様ですか？」

「突然の訪問で申し訳ございません。ことはさんの担任の美代川です。ことはさんの様子が心配だったので、うかがわせていただきました」

「……先生。わざわざ来てくれてありがとうございます。でも、本人は学校に行きたくないそうなんです。なんでも勉強に飽きてしまった、とかで。無理やり行かせようとすると、先生もあの子に嫌われてしまいますよ」

声が少し震えている。

やはり何かを隠している？

ことはさんの身に危険なことが起きているのかもしれない。

「せっかくなので、一目だけ様子を見せてください」

そう言うと、玄関のドアがわずかに開いた。

私はその隙間に手をかけ、半ば強引に押し開けた。するとそこには、小学生の女の子……

毎朝、学校へ欠席の連絡をしていたのは、ことはのお母さんではなかったの。

美代川先生が母親の声だと思っていたのは、ことは自身の声。だから少し高くて、どこか演技をしているように聞こえたのね。そして、本物のお母さんは家の奥で拘束され、助けを求めることもできずにいた。

「勉強に飽きたから、学校へ行きたくない」

ことはは、たったそれだけの理由で、お母さんを閉じ込めていたのでしょうね。

ことはと先生は、これから学校を休んで何をするのかしら？

きっと、ふたりはお家で遊ぶのかもしれないわね。

ことはが飽きるまで。

先生が冷たくなるまで……

ことはさんが立っていた。

ことはさんは無表情のまま、私の目をじっと見ている。

……怪我とかは、なさそうだな。

「なんだ。思ったより元氣そうで安心したよ」

私がそう言うと、家の奥からガタンッともものが倒れる音がした。

それから「んー、んー！」と口をふさがれた人が必死で叫んでいるような声がある。

その声は電話で聞いている母親の声とは違った。

もっとかすれていて、もっと必死だった。

「誰か、いるんですか？　ことはさん、ごめんね、入るね！」

靴を脱ぎ、家へ入って声の主を探そうとした。すると背後から、電話で聞いていた母親の
声
が
し
た。

「先生も明日から欠席だね」

体育館のいれうゆ

俺は友達の時ゅうと、バスケット部の居残り練習で体育館にふたりでいた。

「肝試しにさ、幽霊を呼ぶ怖い儀式、やってみない？」

「儀式？　なんだそれ」

ふたりだけだから、よく声が響く。全校集会で集まっているときは、ヒソヒソ話をしていても声を聞かれることはない。

先生が、人が多いほど、音を吸い込んでしまうから響かないのだと言っていた気がする。

今は足音さえも、キュ、キュ、とよく響く。

これなら、これから儀式を試すのに都合だ。

「ゆうれいを逆から読んで、いれうゆ。これを体育館の中央で思いっきり叫ぶと、幽霊が出るらしいよ。声が体育館に反響すると、その声につられてどんどん集まるんだって」

しゅうは怖がって「やめろよ」なんて言っていたが、聞かないフリをして無理やり体育

館の中央に連れていく。

「もしかしたら、すごい美人な幽霊が出るかもな！」

半笑いで俺は「いれうゆ！」と叫ぶ。

体育館に俺の声が反響する。

しかし、特に変化はない。幽霊も現れない。

「なんだ、つまんない。今度はお前がやってみるよ」

「なんか、寒くなってるない？」

「気のせいだろ」

そう言った直後、急に少し息苦しさを感じた。まるで、満員電車の中にいるみたいに。

「……やっぱり気のせいだって。ほら、早くやれよ」

自分がビビってると思われたくなくて、しゅうを急かす。

しゅうはおそろおそろ「……いれうゆ！」と声を上げる。

しかし、声は反響せず、幽霊も現れない。

俺は「もっと大きな声出さないと。ビビってるだろ？」としゅうを茶化した。
突然、しゅうが震え始める。

「幽霊が……幽霊が、いる」

「は？」

最初にゆうきが「いれうゆ」と叫んだとき、体育館に声が反響した。その声につられて、幽霊たちはもう集まり始めていたのでしょうね。

しゅうが「寒くなってない?」と言ったのも、ゆうきが満員電車の中にいるみたいな息苦しさを感じたのも、気のせいではなかった。

体育館の中に、目には見えない幽霊がどんどん増えていたからなの。

先生は言っていたわね。人が多いほど、音を吸い込んでしまうから響かない、と。

しゅうが叫んだ声が反響しなかったのは、声が小さかったからではない。体育館いっぱいに集まった幽霊たちが、音を吸い込んでいたから。

つまり、幽霊は現れなかったのではなく、見えないだけで、もうそこにぎっしりと集まっていたのね。

……肝試して幽霊を呼ぶなんて、ずいぶん軽い気持ちだったみたいだけれど。

呼ばれたほうが、何もせずに帰ってくれるとは限らないわよ。

辺りを見渡しても、幽霊の姿はない。
もう一度、俺は「いれうゆ!」と叫んだ。
が、今度はさっきと違い、反響しなかった。
「あれ、おかしいな」

人体模型の交換

あたしは、よく「みきって性格悪いよね」と言われていた。
でも、別に悪い気はしなかった。

性格が悪いということは、それだけ、あたしは自由ってこと。周りを利用して、得をしているってことだ。

今日も給食のプリンを休んだ友達のおに届けると言って、公園でひとりで食べた。
みんなにバレたらきつと性格が悪いってまた言われるだろうけれど、これで得をしているんだから、あたしは自分のこの性格を気に入っている。

ある日、理科室を掃除していたとき、あたしにプリンを食べられたことを知らないバカなおから、理科室にある人体模型の噂を聞いた。

その人体模型は木製の大きな箱に入れられていて、見た目はかなりリアルな人間。みんな

怖がっている。

なおによると、人体模型はその人の悪い臓器と自分の臓器を交換してくれるらしい。

心臓、肺、胃、脳。人体模型についているものなら、なんでもだ。心臓に病気があって、余命わずかだった生徒が助かった、という話があるらしい。

「バカみたい」

あたしはこういう話が大嫌い。

「聞くだけで虫唾^{むしず}が走るわ。どうせ上級生が適当に作った嘘^{うそ}に決まっているじゃない」
あたしは本気で信じているなおを笑ったあと、噂が嘘だと証明してやりたくなった。

そうしたら、なおはどんなバカな顔をして落ち込むだろう？

「や、やめなよ、みき」となおに言われたけれど、人体模型の箱の扉を開けた。

中に入っていた人体模型の肩を持つと、何回も揺すって「おい、本当に心臓病の生徒を救ったなら、あたしの悪い臓器とも交換しろよ。ま、あたしはそいつと違って悪いところなんてどこにもないけどな」と言ってやった。

強く揺すられた人体模型から臓器がいくつか箱の床に落ち、手もプラプラと外れそうになる。

「もうやめなって」

なおに言われて、肩から手を離すと、木の扉を思いっきり閉めてやった。

「ほら、なんにも起こらな……」

人体模型は、本当に悪いところを交換してくれるものだったの。
ただし、みきが思っていたように、病気の臓器を交換するだけではなかった。

人のプリンを勝手に食べても平気。

友達をバカにしても平気。人体模型を乱暴に扱っても、悪いことをしたとは思わない。

そんなみきの性格の悪さは脳が生み出していたのね。

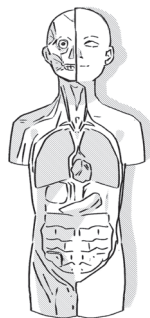
みきの脳は人体模型の中に閉じ込められ、代わりに、人体模型の中にあったものが、彼女の頭の中に入ったの。

最後に聞こえた「あたしの声」は、もうみき本人の声ではなかった。

みきの体を使って話す、人体模型の声だったのね。

これからみきは、木箱の中でずっと立ち続けることになる。

みきは性格が悪いほうが自由で得をしようと思っていたみたいだけど、もう指一本、自由には動かせないわね。



そう言いかけた瞬間、目の前が真っ暗になった。
体がピクリとも動かない。
どこからか、古びた木のおいがする。
声を出そうにも、口も動かない。
どこか狭い場所に閉じ込められている……？
声が聞こえた。
「言われたとおり、悪いところを交換したよ」
それは、あたしの声だった。

すると、壁の向こうから、ささやくような

二十四時間で消える

放課後、友達のみのとスマホを見ながらバスを待っていると、クラスの陽キャグループの動画が目に入った。

動画では陽キャグループ四人が笑いながら祠を壊していた。ほこら

これはたしか、大規模な土砂崩れで亡くなった人たちを祀まつっている祠だ。バス停の近くの山の中にある。

彼女たちは笑いながらスプレーで祠の石に落書きをし、巻いてあったしめ縄を切り裂き、お供え物を遠くへ投げる。最後には石をけり飛ばし、祠を壊してしまった。

「あーあ、絶対炎上するね、これ」えんじょう

動画を見せながら言うと、みのはクスツと笑ったあと「大丈夫よ。二十四時間で消えるから」と言った。

「あー、この動画、二十四時間経つと自動で消えるやつだね。でもさ、こういうのって誰か

が保存して、いつの間にか拡散されるんだよ。てか、私が拡散しちゃおうかな」

そう言うと、みのは「はるかがする必要なんてないよ」と首を振りながら、また笑った。

「彼女たちには関係ないから」

「関係ない？」

みのは時々不思議なことを言う。

まあ、たしかに、こんなことをノリでできる陽キャグループ四人が炎上なんか気にするはずないか。

……でも、そのあとのことを思えば、本当に全部、みのりの言ったとおりになった。

動画は拡散されて炎上した。

けれど、祠を壊した彼女たちには関係なかった。炎上してたくさん非難されて、顔バレまですたのに、彼女たちはひとつも投稿を消さないし、反論もしない。

しかも、あれだけスマホ依存症のように頻繁に更新されていたアカウントは、ピタリと動きを止めた。

「昨日の夜からすごい雨ね。知ってる？ いつものバス停の近くの山で土砂崩れがあったの」教室の窓から灰色の空と雨を眺めながら、みのりが言った。

「土の下って、意外と暖かそうだよね」

► 灯さんの解説

みのりが言った「二十四時間で消える」は、動画のことではなく、祠を壊した陽キャグループの四人のことだったのね。

彼女たちは、土砂崩れで亡くなった人たちを祀る祠を壊した。そんなことをすれば、祠に祀られていたものが怒っても不思議ではないわ。

動画は拡散され、炎上した。顔も知られ、たくさんの人に責められた。

けれど、彼女たちには関係なかった。

バス停近くの山で起きた土砂崩れ。祠を壊した四人は、かつて祠に祀られていた人たちのように、土の下へ消えてしまったのでしょう。

みのりは、最初からそれが見えていたのかもしれないわね。

軽い気持ちで壊したのは、小さな祠だけではなかった。

……自分たちの未来まで、きれいに壊してしまったの。



廊下を走ってはいけない

「学校の廊下を走ってはいけない」

そんなどこにでもある校則が俺の学校にもある。

そして、俺の学校では、そのルールを誰も破らない。

理由は「廊下を走ると、白い手が伸びてきて、その手に捕まると、異世界へ連れていかれる」という怖い噂があるから。

俺は、友達のまさるとその噂が本当か話していた。

まさるは「どうせ、廊下を走らせないために大人が考えた嘘でしょ」と笑った。

度胸試しに、ふたたび廊下を走ってみることにした。本当はいやだったけれど、怖がりだと思われるのはもつといやだった。

ふたたび「さん、にー、いち、ゴー！」と全速力で廊下を走る。

怖い気もするが、普段、禁止されている分、なんだか爽快だ。

息が切れてきた頃だった。

うしろから、ダダダダダダッ、と、足音がした。

幽霊？

それとも、異世界へ連れていく化け物？

捕まったらヤバイ！

ぜえぜえと息を切らせながら、もつと速く走ろうと、手を思いっきり振る。しかし、その足音はどんどん迫ってくる。

やがて白い二本の手が俺たちの肩をつかんだ。

「うわあー！！」

ふたたび同時に叫んだ。

「コラ、いつきさん、まさるさん、廊下を走ると危ないでしょ」

白い手の正体。

それは今年から先生になった若い女性の間篠先生^{ましの}だった。

色白な先生を、怖さも相まって幽霊の手と誤解したみたいだ。

先生は「休み時間が終わる前に早く教室に帰りなさい」と言う。

「なんだ、お前、ビビってたろ」

「お前こそ」

廊下を走ると異世界へ連れていかれる。

追いかけてきた人物の正体が先生だとわかり、安心したいつきたち。

けれど、「廊下を走ってはいけない」というルールを破ったのは、ふたりだけではないわ。

間篠先生も、廊下を走っていた。

最後に先生が消えたのは、ルールを破り、異世界へ連れていかれてしまったからなのでしょう。

だとすれば、次に連れていかれるのは、同じくルールを破ったいつきたち。

捕まれば、もう二度と戻れない。

……この学校のルールは公平みたいね。

生徒でも先生でも、破れば同じ場所へ連れていかれるもの。

俺たちは顔を合わせ、笑い合った。

ホッとした。そして結局、ふたりとも怖がりだとわかって、それがおもしろかった。

「間篠先生、意外と足速いですね」

まさるが茶化するように言うと、間篠先生の姿が見えない。

「あれ？」

見渡しても先生はどこにもいない。

もう先に教室に帰ったのだろうか？

ふと地面を見ると、先生が立っていた場所に、白い手形がベタベタと付いている。

それを見て、まさるがポツリと言う。

「先生って、走ってる俺たちに追いついたんだよね……？」

気づいた瞬間、逃げ出そうとしたが、もう遅かった。